

Title	関係概念としての「機能」：機能主義理論再構成のために
Sub Title	"Function" as a concept of relation : for the reconstruction of functionalism
Author	熊田, 俊郎(Kumada, Toshio)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1983
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.23 (1983.), p.87- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000023-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

関係概念としての「機能」

—機能主義理論再構成のために—

“Function” as a Concept of Relation

For the Reconstruction of Functionalism

熊田俊郎

Toshio Kumada

Functionalism has been argued in terms of some of its aspects, i. e. its logic, its postulate, etc. This monograph focuses on traits of the concept of “function”, because they have something to do with most of the arguments about the validity of functionalism. This present paper surveys the history of the concept and shows the relation between “function” and “functional requisite”, which became indispensable for the functionalists’ logic with the emergence of structural-functional analysis. Then it argues that many problems of functionalism come from the concept of the functional requisite which became substance. If we consider the concept of function as a concept of relation, the typical variation of which is mathematical function, we can use the functionalists’ logic without difficulty. So we will rewrite the functionalists’ logic with substantial concept into that with relational concept. This will not destroy the basic idea of functionalism, which intends to show the relation between the system as a whole and its parts. And this will supply a theoretical basis to functionalists who want to build models, especially mathematical models, of society.

1. 問題の所在

社会学における構造機能主義、ないしそれを含む機能主義は、社会学諸分野に支配的影響力をふるって来た。同時にポレミカルな論点をも提供して来た。

ところで今日の構造機能主義をめぐる議論は、かつての議論と比較して、構造機能主義の凋落を前提としてなされるものが眼につく⁽¹⁾。それでは、構造機能主義の凋落とはいかなる現象であろうか。2つの可能性がある。第1は、他の有力な学派によって淘汰されることである。しかし今のところ、構造機能主義に代わる支配的の学派はない。第2は、発展的に解消することである。これは望ましいことである。しかし現状を見ると、発展的というにはあまりになし崩しにアイデンティティを喪失した観がある。

本稿の目的は、上記の現状認識の下に、広く機能主義

の論理を再解釈し、機能主義ひいては構造機能主義とその他の社会学的研究を架橋するための基礎とする点にある。

2. 機能概念の歴史

機能主義は、広義には芸術も含む一つの社会思想である。社会学における機能主義も、この社会思想としての機能主義と無縁ではない。ところで人類学をも含めた社会学には、機能概念の使用について長い歴史がある。しかしその用法は、必ずしも統一のとれたものとはいえず、機能主義者の分析態度も明断なものとはいえない。本節では、狭義の機能主義に限らず機能概念の意味用法を検討する。

学説史家D. マーチンデルの考えによると機能主義の起源は、生物学や社会科学をダーウィニズムの影響下におく19世紀後半の哲学上の運動にある⁽²⁾。彼によると

機能主義は、その背後に想定されているシステムの大きさによって、巨視的機能主義と微視的機能主義に分けられる⁽³⁾。このように理論の背後に何らかのシステムを想定することは、機能主義の最も重要な特徴となっている。

さてマーチンデールは、「機能」の意味として、①閑放②有用な活動③妥当な活動④体系決定的・体系維持的活動の4つを指摘している。このうち第3、第4の意味に使用される場合に、特定の理論体系の分野すなわち機能主義となると述べている⁽⁴⁾。彼は、これ以上機能概念の中身について詳細な展開はしていない。ここで機能主義の祖型ともいべき、社会有機体論者H. スペンサーを簡単に見ておこう⁽⁵⁾。

スペンサーには次のような文章がある。

構造の変化は、機能の変化なしには生じえない。…
…社会における構造の変化は、直接に観察されるよりも、機能の変化によって指示されることの方が多い…⁽⁶⁾

この文章にみられる「機能」の用法は、「活動」とか「働き」の意味に外ならない。このように彼は、「構造」と「機能」を対置させている。しかし、構造よりも機能を重視するということはない⁽⁷⁾。これに対して機能ないし活動を重視したのはジンメルである。

ジンメルは次のように述べている。

社会というのは、もともと、機能的なもの、諸個人の能動的及び受動的な活動のことであって…⁽⁸⁾

彼の機能概念は、基本的にはスペンサーのそれを継承している。しかし彼は、實在論的社会観を否定し、機能すなわち活動の概念を以って社会を見ようとした。

新明は、スペンサーに代表される有機体論を第1、ジンメルに代表される本源的機能主義——形式社会学——を第2の機能概念を用いる学派としている⁽⁹⁾。以上は、機能主義前史ともいえるものである⁽¹⁰⁾。これらに対し、新明のいう第3の機能概念は、狭義の機能主義のものであり、デュルケームに起源をもつものである。

デュルケームが機能概念を説明している箇所を見てみよう。

あるひとつの社会現象を説明しようとする場合、それを生み出す作用原因とそれがはたす機能とは、別個に探究されなければならない。一般に社会現象はその生み出す有益な結果のために存在するのではないから、それだけに筆者は、目的とか目標という語よりも、すすんで機能という語を用いたいとおもう。だから、明らかにしなければならないのは、考

察される事実と社会的有機体の一般的諸要求との間にはたして対応関係があるのかどうか、そして、この対応関係がどのようなものから成っているかということ…⁽¹¹⁾

彼は、ある社会的事実の有用性と、その事実の発生、存続を目的論的に説明することとの混同を斥けている。つまり個々の事象が社会全体（社会的有機体）に対してどのように役に立っているかを説明する道具として、機能概念が導入される。「機能」とは、ある社会的事実と社会有機体の対応関係のことである。換言すれば個々の事象ないし事実が全体にいかに関係するかということである。このようにデュルケームは、現代機能主義の機能概念のプロトタイプを用意したのである。

デュルケームが提示した機能概念に最も近いのは、ラドクリフ＝ブラウンである。彼は、個体有機体とのアナロジーを用いつつ、「機能」を次のように定義している。

「機能」は全体としての有機体の生命の中でそれが果している役割（part）であり、それが果している貢献である⁽¹²⁾。

「機能」は部分部分の活動が全体的活動……に果している貢献である⁽¹³⁾。

このようにラドクリフ＝ブラウンの機能概念は、部分の全体に対する貢献、あるいは部分の活動が全体の活動に対する貢献という今日の標準を示している。

デュルケーム及びラドクリフ＝ブラウンの機能概念をさきに検討した有機体論者のそれと比較すると、明らかに有機体の活動そのものから、部分と全体の関係へと重点が移っている。しかもいずれも個体有機体のアナロジーを用いている⁽¹⁴⁾。ラドクリフ＝ブラウンの記述を見ておこう。

細胞や器官は「活動」を有しており、その活動は「機能」を有している。……生理学上の反復する過程の機能は、このようにその過程と有機体の欲求（存在の必要条件）とを一致させることであるとしてよいであろう⁽¹⁵⁾。

なおデュルケームにせよラドクリフ＝ブラウンにせよ、萌芽的ながら逆機能、没機能等、後にマートンによって定式化される機能分析の基本的概念は検討されている。

同じ機能主義者といってもラドクリフ＝ブラウンと様相を異にするのは、マリノフスキーである。彼は、機能主義の祖たるを自任し⁽¹⁶⁾、ラドクリフ＝ブラウンのように、機能を「部分の全体に対する貢献」と定義することを拒否した⁽¹⁷⁾。彼にとっての機能は、各項目（文化

現象)が人間の生物的欲求ないしそこから派生する欲求を充足することである⁽¹⁸⁾。

しかしマリノフスキーを更に検討すると、機能についてラドクリフ＝ブラウンとそれほど変わらない表現もみられる⁽¹⁹⁾。このことからマリノフスキーは、デュルケームやラドクリフ＝ブラウンと全く異なる機能概念を持っていたのではなく、逆に同じ概念を持ちながらも科学方法論上の態度として観察可能な身近な現象(栄養の摂取等)に焦点を当てただけである、と考えることができる。

機能主義社会学の中心人物であるマートンは、機能概念のうち次の2点が不分明であるとする。第1は、個々の社会的項目が社会体系・文化体系に貢献する側面のみをとらえて来たが、その反対の現象はどうするのか。第2は、主観的一客観的ないし目的—結果のカテゴリーと「機能」の問題である。第1の問題に対しては機能、逆機能、没機能のカテゴリーを、第2の問題に対しては顕在機能、潜在機能のカテゴリーを提示している。この2種類のカテゴリーを組み合わせて5ないし6種の機能のパターンを作ることができる。しかしここでは、本稿の論旨に合せるため、第1のカテゴリーに関する部分だけを引用しておく。

機能とは、一定の体系の適応ないし調整を促す観察結果であり、逆機能とは、この体系の適応ないし調整を減ずる観察結果である。また没機能的結果の経験の可能性もあって、それは当面の体系にとって無関連なものにすぎない⁽²⁰⁾。

3. 機能的要件と機能主義

構造機能主義は、いうまでもなくパーソンズの影響下にある社会理論の総称である。それでは構造機能主義は、前節の機能主義の中にどういう位置を占めるのだろうか。

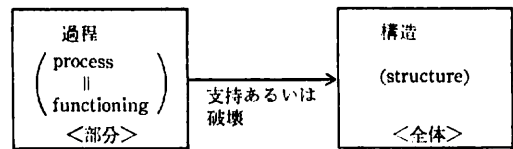
パーソンズは、その晩年に「構造機能分析」という呼称をやめて「構造過程分析」という呼称を採用すべきであるとしている⁽²¹⁾。その言わんとするところは次のとおりである。構造と論理的に等しい位置を占めるのは、過程であって機能ではない。すなわち構造分析に対する過程分析、ないしは両者を併せて構造過程分析というのが考えられる。この構造過程分析と機能分析が並置されるのである。それではなぜ過程(process)と機能(function)を混同したかという点、パーソンズによれば、英語のfunctionは動詞的にfunctioningという表現をすることができるが、システムのfunctioningとprocess

は同じものだからであるという。

パーソンズの次の記述を見てみよう。

動的過程の産物はシステムにとっていかなる結果をもたらすか。そのような結果が、安定を維持したりあるいは変動を生み出す条件に適合したり、もしくはシステムの統合やある場合にはそれを破壊する条件に適合したりするということが、わかるであろう⁽²²⁾。

パーソンズは、動的過程の機能的関係を上記のように説明している。すなわち彼の機能とは、動的過程がシステム全体の維持、安定に貢献しているか否かという関係のことである。この機能概念は、デュルケームやラドクリフ＝ブラウンのものとは何ら異なるところはない。以上のパーソンズの機能概念を図示しよう。



上記のうち構造は、社会の中の安定的なパターン、パーソンズにとっては規範のことである。過程は、構造に対して相対的なものであり、相互行為や後には社会の下部体系間の相互交換過程として現われるものである⁽²³⁾。そして図の中では矢印で表現される関係が、機能なのである。

このように考えてみると、社会学史上パーソンズに帰せられる貢献は、機能分析そのものに関係するものではないことがわかる。機能概念を中心としたわけでないパーソンズが機能主義の中心人物の一人とみなされるのは、彼が機能的要件概念の整理に努力したからである⁽²⁴⁾。

次に機能概念と機能的要件概念の関係について触れることにする。機能的要件に関して言及された最も基本的な記述は、ラドクリフ＝ブラウンの次の表現であろう。

デュルケームの定義では、社会制度の「機能」は、社会制度と社会有機体の欲求との間の一致であるという。……私は、「欲求」(needs)という語の代わりに、「存在の必要条件」(necessary conditions of existence)という語を代置したいと考える⁽²⁵⁾。

この引用からもわかるとおり、「機能」は「存在の必要条件」そのものではなく、社会制度のような項目が社会の存在の必要条件と一致すること、ことばを換えれば、項目が「存在の必要条件」を充足するという関係のことである。社会の「存在の必要条件」は、社会の「機

能的要件」としてパーソンズの社会システム論の中にとり入れられ、彼の理論の中枢部に位置することになる。機能的要件概念がパーソンズの全体系の中に占める位置は無視され、この概念だけが一人歩きを始めてしまった。このことがいくつかの問題を生み出している。

ここで用語について簡単にみておこう。パーソンズが「構造機能分析」を提唱した段階では、機能的必要(functional needs)という語を主として用いている。その後、機能的前提要件(functional prerequisite)、機能的緊急事態(functional exigences)、機能的命令(functional imperatives)を用いている。AGILを指すには、以上の用語を主として用いているが、このほかに機能的問題(functional problems)も用いられている。これらは同じものとみなして差し支えない⁽²⁶⁾。本稿では、パーソンズは多用しないが、機能的要件(functional requisite)を用いる。

さてこのように、パーソンズにおいては機能的要件を指す語すらも定まっていな。にもかかわらず、機能的要件は構造機能主義ひいては機能主義の中心であり不可欠のものである、と一般に考えられている。ところがマートンは、機能的要件の概念は曖昧で、同語反復的・結果論的であるとして、むしろ排そうとすらしている⁽²⁷⁾。こうした食い違いはどこから生じるのであろうか。その原因は、「機能的要件」と「機能」の混同にあると考えてよい。

たとえば小室は、「機能」を「機能的要件」の略称としている⁽²⁸⁾。さすがにこのような極端な見解を明示する者は少ないが、意図せずして両者を混同している場合は多い。両者の混同があればこそ、マートンは機能概念の整理に当たって、機能の同意語として利用(use)、効用(utility)、目的(purpose)、動機(motive)、意図(intention)、ねらい(aim)、結果(consequences)と7つ挙げているのであり⁽²⁹⁾、小室も同様に機能の8つの用法を挙げている⁽³⁰⁾。日常的用法としてならともかく、学術用語としての両者は、厳に区別されなければならない。

機能主義ないし機能分析と機能的要件概念は密接不可分であるとする考えは、機能と機能的要件の混同に由来し、しかもそれには確たる根拠がないというのが本稿における基本認識である。ところでこのように機能主義と機能的要件は必然的に結合しているという考えを明らかにした者として、C. ヘンベルを挙げることができる。

今日機能分析の論理を論ずる場合、ヘンベルの定式化を基礎とすることが多いので、それを簡単にみておこ

う⁽³¹⁾。

ヘンベルによると、経験科学は、単なる記述を越えて説明の体系でなければならない。彼は、機能分析の論理を科学的説明の論理として整理し、理想的な科学を構想する立場から批判を加える。彼にとって理想は、物理科学である。

科学的説明は、次のように定式化される。

$$\begin{array}{l} L_1, L_2 \dots L_i \dots L_m \\ C_1, C_2 \dots C_j \dots C_n \end{array} \left. \vphantom{\begin{array}{l} L_1, L_2 \dots L_i \dots L_m \\ C_1, C_2 \dots C_j \dots C_n \end{array}} \right\} \text{説明項}$$

$$E \quad \left. \vphantom{E} \right\} \text{被説明項}$$

ただし、 L_i は法則、 C_j は条件をさす。さてヘンベルの表現によると、機能主義とは次のような論理をもつ。システム内部に項目 i がある。この i が、内部条件 C_i と外部条件 C_e の下で、 s の機能的要件 n を充足する、というものである。この論理によって機能主義が(科学的に)説明しようとしていることは、ある項目 i ないしその機能的等価項目の集合 I が s 内に存在することである。すなわち、

- (a) t 時点において、 s は c の下で適正に機能している。
 - (b) c の下で n が充足された場合にのみ、 s は機能する。
 - (c) I は n を充足する項目の集合であり、 I は空集合でない。
-
- (d) I に属する項目が存在している。

ヘンベルの機能主義批判は、次のようになされる。上に整理された機能主義的説明の有効性は、科学的説明の3要件を満足するか否かによって判断される。3要件とは、第1に条件の集合 $\{C_1, C_2, \dots, C_n\}$ が異なればそれに応じて異なる E を明示できること、第2に時間的経過の中で事前予測(prediction)及び事後予測(postdiction, retrodiction)が可能であること、第3に説明を経験的にテストできること、である。まず、「適正に機能する」とはどういうことなのか、また I の範囲もはっきりしない。これでは第1の要件を満たさない。次に、社会現象では外生的攪乱要因の存在を無視しえず、またその扱いに成功していない。よって第2の要件も満たされない。最後に、社会の必要(機能的要件)すなわち生存に必要な十分な条件とは何か、そもそも生存とは何かを明確に示していない。第3の要件も満足しない。さらにこうした機能主義的説明全体が、すべてのことを「適正に機能する」という究極の目的との関連で説明するという目的論的説明に陥っている。

以上がヘンペルの機能主義批判の要旨である。彼の論理実証主義の立場からみた科学や社会学理論が唯一正しいものではない。むしろ彼が理想とした古典力学的科学観とは異なった科学観に立つ社会学理論が必要であろう。しかしここで注意すべきことは、彼の整理による機能主義の論理ないし機能主義的説明に機能的要件概念が必ず現われることである。さらに彼の機能主義批判は、直接間接に機能的要件を批判している。これに対する機能主義者の反論に、彼の機能的要件中心のまとめ方を批判した者はいない。

このように機能主義の論理の中心に機能的要件概念があるとする考え方は、近年に至るも変わっていない。棚瀬は、構造機能主義を実証性及び有効性の2つの側面から批判する⁽⁸²⁾。有効性の問題は、静態性批判である。もう一方の実証性の問題は、機能的要件概念を中心とする機能主義の論理の問題である。彼の批判は次のとおりである。構造機能主義の中心論理は、社会に機能的要件を設定し、社会構造によるその機能的要件の充足を研究することである。しかし機能的要件を操作的に定義することは、事実上不可能である。すなわち特定化や測定不可能な機能的要件概念を採用すれば実証研究に向かず、反面実証研究を志向すれば方法論上の独自性（機能的要件の設定）を喪失するというジレンマに直面する、というのである。

棚瀬は、このように構造機能主義を批判した上で、具体的個人に注目しつつ、非規範的状况の下での事象の継起(過程)を扱う「過程分析」が台頭して来たことと述べる。この結論の当否はともかく、彼もまた機能的要件設定を構造機能主義の中心と捉えていることに注目しよう。なお彼は、マートンを構造機能主義者の一変種とみている。ということは、彼が批判の対象としている構造機能主義は、本稿で扱う機能主義と同じものとみなして大過ない。

当然のことながら上記の批判者ばかりではなく、機能主義者の側からも、機能的要件設定は、機能主義の論理の基礎であると考えられている⁽⁸³⁾。また吉田は、それを要件論的アプローチとして、社会科学における最も基本的なアプローチの1つに挙げて積極的に評価している⁽⁸⁴⁾。

このように機能主義社会学が展開するにつれ、機能主義の論理の根柢に機能的要件概念があるということが、ますます明示的に表明されるようになって来た。次に、この機能的要件の中身とその問題点を検討することにして

4. 機能的要件とその問題点

機能主義が、機能的要件概念を必ず用いながら定式化されることは、前節にみたとおりである。ここでこの機能主義は何をしようとしているのか、また何を説明しようとしているのかを見ておこう。

いうまでもなく第1は、前節でとりあげたヘンペルが述べるように、ある項目がある社会に存在する事実を説明することである。すなわち西欧的合理精神からすれば、無意味で迷妄さを示すとしか思われぬ非西欧社会の習俗や儀礼が、社会にとって機能的である、あるいは社会の欲求（機能的要件）を満たすという事実があり、それゆえそうした文化項目が存在している、という議論の立て方がこれである。

第2に、パーソンズ以後の構造機能主義社会学にみられる議論を挙げることができる。ここで重点がおかれるのは、社会の秩序維持、安定性・不安定性等である。もちろん前節でみたように、この議論における機能的要件は、第1の議論におけるそれを直接に継承している。しかしある項目の存在が機能的要件を充足する仕方についての記述は比較的弱い。むしろここにおける機能的要件概念は、その充足手段である項目から比較的独立した概念であると考えた方がわかり易くなっている。

機能的要件概念は、いうまでもなく論理的構成概念ないし構成概念である。構成概念の妥当性は、理論全体の中での他の概念との連関性や整合性によって判断される。これは、機能的要件が何を説明するためにどう使われるかという問題でもある。上記した機能主義の2つの議論の立て方が、これに当たる。これら2つの機能主義の間には、重大な質的転換があるとみた方がよい。なぜなら、第1の立場は社会の存在ないし存続を前提として項目の存在理由を示す傾向があるのに対し、第2の立場は社会の存続を説明しようとする傾向があるからである。それに加えて、機能的要件の実在性は、それを充足する項目の存在に依存するにもかかわらず、その地位の独立性が著しく高まっているからでもある。またこのことは、機能的要件設定の仕方にも影響する。すなわち第1の立場は、ある項目が充足する機能的要件は何かという点から出発するであろうし、第2の立場は、社会システムの同一性や同一性の保持あるいは変動とは何かというところから出発してそのための条件を探る方向へと向うであろう。

社会分析に当って機能的要件をアド・ホックに設定するか、それとも抽象的に整理された枠組として設定する

かということは、これまでも社会学者に問題とされて来た⁽⁸⁶⁾。その結論の大部分は、分析目的によっていずれかを採用すればよいというものである。しかしこれまで本稿で検討したところによると、双方の機能的要件設定方法とも基本的には機能主義的発想に基づくものであるが、両者の機能的要件概念の利用目的は異なっており、したがってその説明能力や論理的地位も異なっている。これまでの機能的要件概念をめぐる機能主義批判は、ヘンペルのように実証性批判が多い。このことに関して次のように考えることもできる。機能主義が展開する過程でいくつかの用法の異なる機能的要件概念が現われた。この中には実証に向くものも向かないものもある。社会学者が機能的要件概念の論理的地位は常に等しいと考えていることもあって、異質な概念を一まとめにした上で、その実証性等が批判されている。

異質なものの混同という点からすれば、上記のように実証可能性の点で性質を異にする機能的要件を一まとめにする問題点もあるが、さらにこの概念の変数としての性質の混乱もある。それは、1つには機能的要件の尺度構成の問題であり、1つには機能的要件充足の仕方の問題である。

機能的要件が、単なる社会現象の記述道具に止まるのではなく、機能主義理論を構成する基礎概念となるためには、その性格が確定されなくてはならない。それは、機能的要件の値をどうとるか、すなわち尺度構成の問題である。

スティーンズは、尺度を名義尺度・順序尺度・間隔尺度・比率尺度に分けている⁽⁸⁶⁾。名義尺度は、野球選手の背番号のように相互の弁別のためのものである。順序(序数)尺度は、鉱物の硬度のように相互の順序のみ意味のある尺度である。間隔(距離)尺度は、摂氏温度のように、差分の大きさには意味があるが、0度に絶対的な意味のないものである。比率(比例)尺度は、長さや重さのように四則演算の可能な尺度である。

心理学の研究などにおいては、尺度構成の問題は十分検討されている。なぜなら尺度の相異によって、作られるモデルや可能な演算が限られてくるからである。しかし機能的要件の尺度が問題とされることは、きわめて希であり、正面から問われたことはないと言ってよい。

機能主義なかんづくパーソンズ以後の構造機能主義の問いの立て方からすると、複数の機能的要件の値を総合評価し、社会の秩序維持に十分か否かを判定することが、機能的要件論の中心となるはずである。

そこで機能的要件をめぐる議論の中で、その尺度はど

のように考えられているか検討してみよう。古典的機能主義の考えでは、ある項目がある必要(機能的要件)を満たすか否かのみが問題とされる。さらにいえば、機能的等価項目が、その項目に代わって必要を満たすこともできる。この場合の機能的等価項目がより必要を満たすかということ、あまり問題とされない。すなわち満たすか否かのみが問題となるのであるから、この場合の機能的要件は、名義尺度であると考えられる。パーソンズの場合も基本的には、満たすか満たさないかのみを問題としており、この尺度で考えているとみなすことができる。

わが国における構造機能主義者は、機能的要件が順序尺度以上の尺度によって構成されると考えて機能主義理論にとりこもうとしている。吉田は、構造機能主義の社会システム論を、情報-資源処理システムとして再解釈した上で、「一定の種類の情報-資源処理の一定のレベルのフローまたはストック」と機能的要件(彼は単に「要件」と略称する)を定義している⁽⁸⁷⁾。彼が述べるところを言い換えると、機能的要件は、システムの活動と別個にシステムの存続の条件として立てられる指標ではなく、活動の水準そのものである。その活動水準が、一定値になるかあるいは一定範囲(彼の表現では「許容範囲」)に入ることを以って、機能的要件は充足されることになる。彼はかつて、この原型となった発想を、組織の革新過程に当てはめたことがある⁽⁸⁸⁾。このときには、利益や売上高の比率ないし絶対額を要件としていた。この場合の要件は、比率尺度等順序尺度以上のものと考えられる。

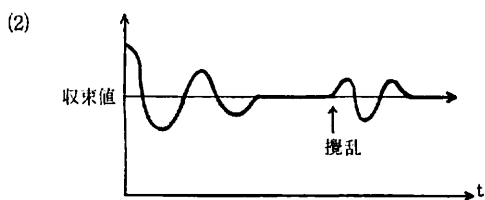
以上に述べたように、同じ機能主義の名の下に、異なる機能的要件概念が並存している。その異質性とは、典型的には値のとり方の差異による。構造機能主義の議論にみられる機能的要件間の比較や総合のためには、このような概念の性質についての検討がなされねばならない。

さらに、上述のことから予想されるように、機能的要件充足の仕方にもいくつかの型がありうる。以下それを図示しよう。

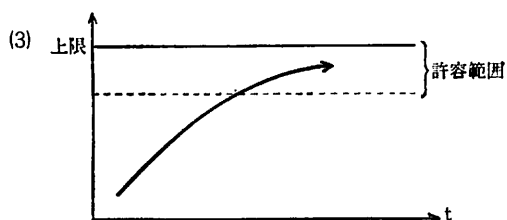
(1)

機能的要件	項目の存在	
	有	無
充足	○	
不充足		○

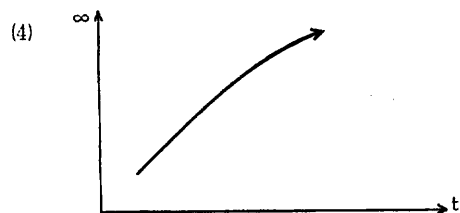
この丸印の部分を中心に扱うのが、機能主義の祖型である。



これは、小室の機能的要件の説明にみられる充足の仕方である⁽³⁹⁾。彼は、冷蔵庫の温度を例に出す。吉田ならば、縦軸の値を機能的要件としたであろうが、彼は図の中の収束値を機能的要件（制御目標）としている。



これは、前述の吉田の考えである。縦軸が機能的要件になる。



これは、機能的要件充足度が無限に高くなり得る場合である。パーソンズの「一般的適応能力」⁽⁴⁰⁾がこれに近いかもしれない。

5. 機能概念の再検討

前節までに述べたことは、機能主義の論理、その展開過程で質的転換を伴いながらも機能的要件概念が重要性を増したこと、そして機能的要件概念は未整理の部分が多いことである。それでは機能的要件概念は、今後さらに洗練されて行くのであろうか。

以前に述べたように、機能的要件概念の論理的地位の独立性は高まっている。しかし機能主義の再生のためには、この概念を本来の2項関係としての機能主義⁽⁴¹⁾の論理の中での用法に引き戻した方がよい。なぜなら、構成概念は、他の概念との関連性にその存在意義があるか

らであり、また関連概念によって存在理由が保証されるからである。

2項関係とは、部分を示す項目と全体を示すシステムとの関係のことであり、項目の存在がシステムの存続条件(機能的要件)を満たすという関係のことである。このことをマートンが引いたホピ族の雨乞いの儀式の例⁽⁴²⁾を用いて、さらに詳しく検討してみよう。

マートンは、「雨乞いの儀式が、集団のアイデンティティを高める」という関係を、(潜在的な)機能とした。この場合、「雨乞いの儀式」が項目であり、「集団のアイデンティティ」がシステムを表現する。以上のことを、表現を換えると次のようになる。雨乞いの儀式の有無という2つの値を元とする集合と、集団のアイデンティティの高低という2つの値を元とする集合がある。この2つの集合の間に、有と高、無と低という対応がみられる。この対応関係のことを、「機能」と呼ぶことができる。

集合論の用語で表現すると、関係は、複数の集合の直積集合の部分集合のことである。上記の機能もこの関係の一種と考えることができる。さらに上記の機能は、関係の中でも特殊なものである。一対一対応をしており、これは写像ないし関数と呼ばれる。すなわち「機能」を数学的に表現すると「関数」になる。

以上のように機能概念を再解釈すると、機能的要件はどう位置づけられるのであろうか。第4節に示した機能的要件の諸用法を念頭に考えてみると、2項関係の中でシステムを表現する項は、吉田の意味での機能的要件に近いわけであるが、上記のように機能概念を再解釈すると、機能主義の論理の中で機能的要件概念に特権的地位は認められなくなる。すなわち機能的要件を機能主義に不可欠の概念として用いる必要はなくなる。

そうすると関係している2項に何をとりかが問題になる。一般的な言い方をすれば、社会の部分を示す項目に関する指標(その1つが有無)を一方にとり、他方に社会システムの活動を示す指標をとるということになる。しかしこれは論理的に要請される問題ではなく、一般通念上機能主義的な項の選定の仕方が否か問われるだけである。すなわち狭義の機能は、一方に全体を示す項、他方に部分を示す項をとるという特殊な項選定規準をもつ関係の一種であり⁽⁴³⁾、社会の諸関係全体の一部をなす。観点を換えると、狭義の機能が伝統的機能概念の代替物である限り、機能主義の蓄積を無にすることはない。

以上の解釈に従うと、機能・逆機能・没機能は次のように解釈される。2項関係を座標軸を用いると、機能は

右上り、逆機能は右下り、没機能は水平という関係である。但し横軸は、項目の活動水準や有無をとって右へ行くほど値が大きくなり、また縦軸は、上へ行くほどシステムの調整を促すと考えられるようにとる。もとよりこのような表現は、全く厳密さを欠いている。それは、機能・逆機能・没機能の区別が2項関係の解釈の問題にすぎないからである。

以上のような機能概念の解釈は、狭義の機能主義の範囲を逸脱している。なぜなら機能主義は、ある項目の存在理由や社会の秩序維持理由を説明するための解釈体系としての性格が強かったのに、上記の解釈は、そうした性格を弱めざるをえないからである。

反面、相互に無関連なまま社会学の諸分野に広範に存在する諸技法や論理を整理統合するためには、上記の解釈は有効であると思われる。さらに副次的効果として、機能と機能的要件の混同を始めとして諸概念の混乱を正すこともできる。

6. 結 語

機能主義という名で呼ばれる分析方法の中で、機能概念は曖昧なまま放置され、いくつかの用法が併存している状況がある。本稿における作業は、そうした機能主義の発想のエッセンスから機能概念を再構成する試みであった。そのために、この概念の歴史をたどり、問題点を抽出した。

今日、機能概念は、社会現象のアド・ホックな解釈のための道具としてはもちろん、社会システムを導入した社会学理論の基礎概念としても用いられることが多い。その社会学理論は、論理実証主義による伝統的科学観に依拠しながらも理論と実証を連結しえないでいる。

こうした機能主義社会学の限界の一端は、機能主義が機能的要件を必然的に伴うものとして捉えその機能的要件を実体的概念としたことによる。本稿では機能を徹底して関係概念として捉えて来た。機能を関係概念と捉えることは、そのマイナスよりプラスの方が大きい。

社会学理論は、他の学問分野からのアナロジーの集積としての社会システムを扱うよりも、社会の諸関係を扱うための論理のシステムを扱うべきである。またそれは、社会学研究におけるモデル構築の基礎を提供すべきである。またそのような社会学理論を構想するためには、社会学の蓄積を効果的に利用する方法を考えなくてはならない。本稿は、社会学史上最大の影響力をもった機能主義の中心概念である「機能」を、関係概念と読み直すことにより、以上の準備作業の一つとすることを意

図したものである。

<註>

- (1) 棚瀬孝雄「社会分析における個人の地位——構造機能分析から過程分析へ」『法学論叢』(1)一第103巻2号, (2)一同3号, (3)一同4号, (4)一同5号, 1978
下田直春『社会学的思考の基礎』新泉社1978を参照
- (2) マーチンデール, D. (新睦人他訳)『現代社会学の系譜』未来社 1974 478頁
- (3) 同訳書 500頁
- (4) 同訳書 481頁
- (5) スペンサーも機能主義の源流の1つである。なお、ダーウィンは種や系統発生について述べているのに、スペンサーは社会を個体有機体になぞらえたという指摘もある。Buckley, W., "Sociology and modern Systems Theory" Prentice-Hall 1967, p. 12
- (6) スペンサー, H. (前田穰訳)『社会学原理』, 安田三郎編『原典による社会学の歩み』講談社 1974 498頁より
- (7) 新明正道『社会学的機能主義』誠信書房1967 88頁
- (8) ジンメル, G. (清水幾太郎訳)『社会学の根本問題』岩波文庫 1979 22頁
- (9) 新明正道 前掲書 特に第3章
- (10) 厳密に時間的前後関係があるわけではない。
- (11) デュルケーム, E. (宮島喬訳)『社会学的方法の基準』岩波文庫 1978 196頁
- (12) ラドクリフ=ブラウン, A. R. (青柳まちこ訳)『未開社会における構造と機能』新泉社 1975 248頁
- (13) 同訳書 250頁
- (14) 個体有機体のアナロジーによって諸概念を説明する方法は、今日でも行なわれている。たとえば, Abrahamson, M., "Functionalism" Prentice-Hall 1978
- (15) A. R. ラドクリフ=ブラウン 前掲訳書 248頁
- (16) マリノフスキー, B. (姫岡勤・上子武次訳)『文化の科学的理論』岩波書店 1958 163頁
- (17) 同書 175頁
- (18) 同書 171-172頁
- (19) 同書 56頁
- (20) マートン, R. K. (森東吾他訳)『社会理論と社会構造』みすず書房 1961 46頁
- (21) T. パーソンズ, 富永健一(対談)「社会システム理論の形成」『思想』第3号, 1979 16頁
- (22) Parsons, T. "The Social System" Free Press 1951 pp. 21-22
- (23) see idem "The Present Position and Prospects of Systematic Theory in Sociology" (1945) in "Essays in Sociological Theory" (revised ed.) Free Press 1954
- (24) Abrahamson op. cit. pp. 34-35
- (25) ラドクリフ=ブラウン前掲訳書 246頁
- (26) Sklair, L. "The Fate of the 'Functional Requisites' in Parsonian Sociology" British Journal

- of Sociology, March, 1970 p. 32
- (27) マートン 前掲訳書 46-47頁
- (28) 小室直樹「構造一機能分析の論理と方法」青井和夫編『理論社会学』(社会学講座1) 東京大学出版会 1974 35頁
- (29) マートン 前掲訳書 19頁
- (30) 小室直樹「構造機能分析の原理」『社会学評論』第18巻3号1967 24-27頁
- (31) Hempel, C. G. "The Logic of Functional Analysis" in "Aspects of Scientific Explanation and other Essays in the Philosophy of Science" Free Press 1965
- (32) 棚瀬孝雄 前掲論文
- (33) たとえば、富永健一「構造と機能」富永健一・塩原勉編『社会学原論』(社会学セミナー1) 有斐閣 1975 67頁
- (34) 吉田民人「社会科学における情報論的視座」『情報社会科学への視座』(情報社会科学講座)学習研究社 1971, 同「生産力史観と生産関係史観」『別冊経済評論』No. 5, 1971
- (35) 小室は、これを変差的機能分析(開機能主義)と固定的機能分析(閉機能主義)の問題として考察している。小室直樹 前掲論文「構造一機能分析の論理と方法」35-38頁
- (36) Stevens, S. S. "Scales of Measurement" (1951) reprinted in Steger, J. A. (ed.) "Readings in Statistics for the Behavioral Scientist" Holt, Rinehalt & Winston 1971
- (37) 吉田民人「社会体系の一般変動理論」青井和夫編『理論社会学』(社会学講座1) 東京大学出版会 1974 202頁
- (38) 吉田民人「社会変動と革新」土方文一郎・宮川公男編『企業行動とイノベーション』日本経済新聞社 1973 76頁
- (39) 小室直樹 前掲論文「構造一機能分析の論理と方法」34-35頁
- (40) パーソンス, T. 矢沢修次郎訳『社会類型一進化と比較』至誠堂 1971
- (41) 新明正道 前掲書 附録二「機能の概念について」参照
- (42) マートン 前掲訳書 58-59頁
- (43) 機能主義の特徴を、全体と部分の関係に対する関心とする見解は多い。この点については、C. G. Hempel 前掲書のほか、Nagel, E. "The Structure of Science" Harcourt, Brace & World, INC, 1961 参照